

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：22604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17033

研究課題名(和文)景気循環論の原風景としての戦後アメリカの経験に対する歴史的考察

研究課題名(英文)Historical analysis of post-war United States experiences as a prototypical reality of business cycle theories

研究代表者

高見 典和 (Takami, Norikazu)

首都大学東京・社会科学部研究科・准教授

研究者番号：60708494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：第二次世界大戦以降の景気循環論および、それを含むマクロ経済学は、戦後の30年間に生み出された諸理論によって出発したため、この期間の政治経済史、特に学問の中心であるアメリカの政治経済史を考察することによって、現代のマクロ経済学の歴史的背景を明確にすることができる。この目的に基づいて、1960年前後の政策論争が、フィリップス曲線(インフレ率と失業率の間に負の関係があることを示す曲線)の提示につながったことを明らかにした。合わせて、この時代のマクロ経済学の背後にある様々な学問的变化を跡付けるために、20世紀半ばの計量経済学や、IS-LMモデルや経済成長理論などの歴史について、論文や記事を執筆した。

研究成果の概要(英文)：Post-WWII business cycle theory and macroeconomics that includes it, started with the theories produced during the thirty-year period after WWII. Therefore, examination of political and economic history of this period, especially the one of the United States, allows us to clarify the historical background of contemporary macroeconomics. Starting with this purpose, this research showed that the policy debate around the year 1960 led to the presentation of the Phillips curve (curve showing negative relationships between inflation rate and unemployment rate). In addition, the interest in various disciplinary transformations behind macroeconomics of this period led to the writing of articles on econometrics of the mid-20th century, the IS-LM model, and the growth theory.

研究分野：経済学史

キーワード：現代経済学史 マクロ経済学 現代アメリカ史

1. 研究開始当初の背景

海外の経済学史研究では 1990 年ごろから一部の研究者によって、アーカイブ資料を用いて、現代科学論の知見を利用した文脈的な歴史研究が成果を上げており、研究代表者は、過去の在外研究の経験からその手法を習得した。ただし、そのような手法は、まだ十分に活用されているとは言いがたく、様々な新しい問題への応用の余地があった。

2. 研究の目的

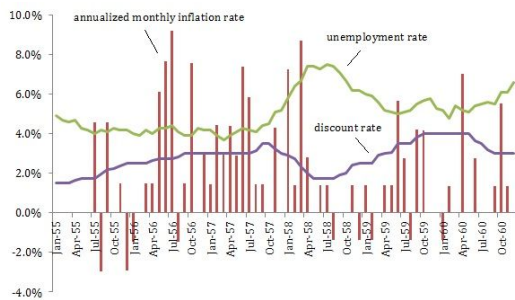
本研究では、戦後のマクロ経済学、特に景気循環論の歴史に焦点を当てた。従来のにも、マクロ経済学は各時代の政治的・社会的背景の影響を受けやすい事が示されている。この観点から、これまでに理解されていない時代背景からの影響を、詳細な歴史的資料を用いて考察する事を目指した。

3. 研究の方法

アメリカの大学図書館などで歴史的資料を入手し、現代科学論や、同時代を扱った近年の経済学史研究における知見と照らし合わせて、学問上の変化に影響を与えた様々な歴史的な文脈を発見・考察する。

4. 研究成果

(1)2015 年に *History of Political Economy* に出版された論文 "The Baffling New Inflation" では、政治家、新聞記者、経済学者といったさまざまな歴史的アクターの発言をもとに 1950 年代のインフレ論争を考察した。当時の物価変動、具体的には 1955~58 年のインフレが、金融引き締めや不況への転換にもかかわらず継続したことが注目され(図 1 参照)、物価変動は総需要の変化ではなく、供給側の要因(大企業や労働組合による独占力を背景とした価格賃金引き上げ)によって引き起こされているという考え



方が広まった。つまり、いわゆるコストプッシュ・インフレ理論が高まりをみせた。

図 1 1955~60 年のアメリカのインフレ率、失業率、公定歩合

当時の議会では、このインフレに対して複数の調査が実施され、多くの経済学者が参加した。この議会調査によってコストプッシュ・インフレ理論が広まり、現在の経済学者にとっても馴染みのある 1960 年のポール・サム

エルソンとロバート・ソローのフィリップス曲線に関する論文や、ミルトン・フリードマンの金融政策の波及効果ラグに関する研究が触発されたことにも注目した。そして、このような 1950 年代における一般のインフレ理解のシフトが、後のケネディ政権やニクソン政権の物価統制の基礎となったことを示唆した。

(2)20 世紀後半の景気循環理論をより十分な観点から考察するために、20 世紀半ばの計量経済学の歴史、および経済学方法論に关して主として研究を行った。具体的な成果としては、この両方の論点を取り入れた、「20 世紀前半の計量経済学の歴史：サーベイと計量書誌学的考察」という論文を完成させ、査読付き学術雑誌『経済研究』に受理された。20 世紀後半のマクロ経済学の背後には、同時期のマクロ計量モデルの発展という重要な歴史的な文脈があり、計量経済学の歴史は、本研究課題を進める上では欠かすことができないテーマだと判断した。

同論文では、既存の研究も参照しながら、20 世紀初頭に静学的経済理論を批判するために初歩的な計量分析を用いたヘンリー・ムア、より体系的に数理統計学を導入し、組織面でも大きな貢献をしたラグナー・フリッシュ、1930 年代に大規模なマクロ計量モデルを構築したヤン・ティンバーゲン、計量経済学に明確に確率論を導入したトリグベ・ハーベルモヤコウルズ委員会の研究者について叙述した。さらに、計量書誌学的手法を用いて、20 世紀後半において重要な計量経済学者を析出した(以下の表 1 はその一部を示している)。

	1933-59	1950-69	1960-79
1	Samuelson PA	Arrow KJ	Arrow KJ
2		Samuelson PA	Samuelson PA
3	Frisch R	Koopmans TC	Theil H
4	Koopmans TC	Klein LR	Debreu G
5	Tintner G	Theil H	Klein LR
6	Tinbergen J	Hicks JR	Koopmans TC
7	Marschak J	Lange O	Zellner A
8	Arrow KJ	Wold H	Anderson TW
9	Hotelling H	Debreu G	Nerlove M
10	von Neumann J	Solow RM	Basman RL

表 1 『エコノメトリカ』の論文が引用した論文の著者発現数順位

本論文ではこれらの議論を通じて、経済学における理論と実証のあいだの緊張関係が、「モデル」という発想の普及によって無害化されたということを指摘するとともに、コウルズ委員会以降の計量経済学に関する研究の方向性も提案した。

(3)『経済セミナー』で、連載記事の一部を担当し、20世紀半ばの経済学の数理化やマクロ経済学の確立について解説した。近年の、特に欧米での経済学史研究に依拠して、本研究の主題と同時代の経済学の顕著な変化をサーベイし、本研究に新たな視点を取り込むことを目指した。扱ったテーマはそれぞれ、計量経済学、ゲーム理論、行動経済学、IS-LMモデル、経済成長理論である。

(4)まだ日本で十分に知られていない現代科学論や、それに影響を受けた近年の経済学方法論の研究動向を広めるため、D・ウェイド・ハンズ著の*Reflection without Rules* (2001, Cambridge University Press)の訳書を慶應義塾大学出版会から刊行した。

本訳書では、経済学史への意義を論じた解説も執筆した。解説では、まず同書の要約を行い、経済学方法論や経済学史へのインパクトを述べた。すなわち同書は、近年の科学哲学・科学論を詳細にサーベイすることで、経済学方法論における単純な科学哲学の利用を批判し、経済学方法論のスコープを著しく拡大させた。このため、現在、経済学方法論では(経済学史においても一部の研究者の間では)、同書で紹介される主要な洞察「自然主義」「社会学的転回」「プラグマティズム」「実在論」などに基づく洞察を考慮に入れず研究を行うことは困難となっている、と述べた。

その後、同書でも言及されているロイ・ワイントラウプやメアリー・モーガンの、本書刊行後の研究を紹介し、経済学史や方法論がよりローカルな知識創造のプロセスに注目が集まっていることを示し、同書がこの変化に果たした役割を強調した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

高見典和, ソローを中心とした経済成長理論の歴史, 『経済セミナー』2018年2・3月号85-92頁, 査読無

高見典和, ケインズとIS-LMモデル, 『経済セミナー』2017年12月・2018年1月号54-59頁, 査読無

高見典和, 行動経済学の由来, 『経済セミナー』2017年10・11月号95-101頁, 査読無

高見典和, ゲーム理論の始まり, 『経済セミナー』2017年8・9月号62-68頁, 査読無

高見典和, 20世紀半ばの計量経済学, 『経済セミナー』2017年6・7月号91-96頁, 査読無

高見典和, 20世紀前半の計量経済学の歴史 - サーベイと計量書誌学的考察 -, 『経済研究』68巻3号264-279頁, 2017, 査読有

Norikazu Takami, The Baffling New Inflation: How Cost-push Inflation Theories Influenced Policy Debate in the Late-1950s United States. *History of Political Economy*, 47 (4): 605-629. Winter 2015. 査読有

DOI: 10.1215/00182702-3321336

〔学会発表〕(計4件)

高見典和, 20世紀前半の計量経済学の歴史, 経済理論・政策ワークショップ(東京工業大学), 2017年5月27日

Norikazu Takami, How Pigou Came to Adopt the IS-LM-Model Reasoning, International Workshop on "Economic Thought of Cambridge, Oxford, LSE and the Transformation of the Welfare State," (Nice, France), 2017年3月19日

Norikazu Takami, The Baffling New Inflation: How Cost-push Inflation Theories Influenced Policy Debate in the Late-1950s United States. 経済学史学会(滋賀大学), 2016年5月30日

高見典和, 経済学史における経済学方法論の意義, 東京経済研究センター(早稲田大学), 2015年7月18日

〔図書〕(計1件)

D・ウェイド・ハンズ 著, 高見典和, 原谷直樹, 若田部昌澄 監訳, 『ルールなき省察: 経済学方法論と現代科学論』, 慶應義塾大学出版会, 2018年3月

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

高見典和 (Norikazu Takami)

首都大学東京・社会科学部准教授  
研究者番号: 60708494

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者  
なし